幼年教育研究年報　第22巻
The Annual Research on Early Childhood, 2000, **22**, 19-26

幼児期における名詞の獲得過程
—量的・質的検討の試み—

小坂　圭子[1]

The Process of Acquisition of Noun during Childhood: A Quantitative and Qualitative Analysis

Keiko Kosaka[1]

This study investigated the process of acquisition of noun during childhood. The conversations of a one-year-old boy and his mother were gathered four to seven times a month for three years. Based on this protocol, the nouns uttered each month were isolated. The nouns gained for each six months were classified into 14 categories. The results showed that the number of nouns greatly increased from 1 year 7 months to 2 years old. Although the increase in the number of nouns slowed down from 2 years 7 months to 3 years old, it gradually increased again after 3 years old. From 2 years 7 months, the increase of new nouns classified into the Social Life category was greater than that of the Home Life category. These results suggested that the process of acquisition of noun was related to the profundity and expansion of daily life experience.

Key words: acquisition of noun, young children.

子どもが1歳を過ぎる頃から短期間のうちに多くのことばを使い始めることに驚き，その成長を喜ぶ大人の姿はごく日常的にみられる光景であろう。昔から，多くの研究者が，乳幼児期の子どもが驚異的な速さでことばを獲得していく様子に大いなる関心を抱き，その獲得の過程，つまり言語発達の過程を追跡してきた。今では，子どもの言語発達は，喃語，初語，一語文，二語文といった定められた順序を経ることが通説となっている（例えば，綿巻，1979）。

喃語とは，子音-母音からなる音節の連鎖が発声されたものである。初期の喃語は，物を使ったひとり遊びや外界を探索する際に，自己刺激的に産出されることが多いが，その後，イナイイナイバーのような儀式化された遊びに組み込まれていく（綿巻，1989）。そして，8か月から1歳5か月の間に，最初の有意味語である初語が出現する。初語の音声形式は大人の使う慣用語に基づいているという点で個人に特有な語と異なる（綿巻，1989）。初語の出現時期を調査した研究は古く1910年代にも存在するが，調査結果を総合すると，個人差はかなり大きい(Harris, Jones, Brookes, & Grant, 1986)もののほぼ1年目の誕生月前後（村田，1977）に出現すると考えてよいようである。その後，安定して使える語の数が10語になるまでには3, 4か月かかるが，10語あたりから少しずつ加速し始め，50語あたりから急上昇する（綿巻，1989）。この時期以降の語彙数の急上昇は，語の爆発的増加(word explosion)と呼ばれ，だいたい1歳半(Nelson, 1988)から2歳（藤永・盛岡，1970）を越えたあたりに見受けられる。

獲得されていく語彙については，量的・質的検討が試みられている。天野(1976)は，語彙量の発達に関する10件の調査結果を一覧にまとめている。その一覧を参考にすると，各年齢段階での語彙数のレンジは，

1　広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

1-2歳で186-395語，2-3歳で886-1066語，3-4歳で1540-1675語，4-5歳で2050-2386語，5-6歳で2289-3182語となっている。このように，語彙量の発達過程についてはほぼ1年区切りで追うのが通例となっており，また，その語彙数を品詞別に算出する試みは比較的なされていない。

一方で，獲得語彙の内容を綿密に調査した研究として，Nelson(1973)による研究が挙げられる。Nelson(1973)は，10か月から2歳6か月の子ども16名について，初語発現期から初期文生産期までの発話に現れた語彙を，名詞類，動作語，修飾語，個人-社会語，機能語の5種類のカテゴリに分類した。各児の初語からの50語を上述の5カテゴリによって分類し，各カテゴリの頻度の平均値を求めた結果，①名詞類の圧倒的な多さは命名学習(label learning)の進行と関連する，②動作語は予想に反してあまり多くない，③修飾語は属性を示すもの(red, prettyなど)よりも状態や機能を示すもの(dirty, hotなど)の方が多い，という3点が指摘された。更にNelson(1973)は，圧倒的に多く出現した名詞類を，出現順に10語ごとにまとめ，50語獲得にいたるまでを5段階に分け，最初段階（1-10語）と最終段階（41-50語）のデータを意味内容から分類した。その結果，最初段階では[動物]，[食物]に分類されることばが多く発現したが，最終段階では[食物]は依然として多かったのに対して[動物]は減少し，代わりに[衣服・容姿]が多くなったことを見出した。子どもの語彙獲得は，身の回りの具体物，たとえば乗り物，食べ物，動物，玩具，道具を表す語やよく知っている大人の名前や身体の部位などから始まる（例えば，Butterworth & Harris, 1994）ことは，経験的にもよく知られていることである。また，各時期における品詞別出現率を比較した場合，一貫して名詞が第1位であることを示す研究もある(例えば，Hull & Hull,1919)。以上から，子どもの語彙獲得の様子を最初期から追っていく際には，まず，最も早く且つ最も多く出現する名詞に着目して調査することが適当であると判断し，本研究では名詞に限って検討することとする。

ところで，先に紹介したNelson(1973)が設定した5発達段階は，出現語数に基づいて設定されているため，各段階で見出された発達的変化がどの年齢段階に相当するのかについては推測の域を出ない。つまり，これまでの先行研究においては，初語発現期以降に獲得された名詞を，量的（総語数）にも質的（意味内容）にも，1年以下のスパンに区切って継続的に追った研究は見当たらない。以上から，本研究は，初語が出現し始める1歳期から名詞の語数と名詞の種類との推移を数か月単位で確認していくこととする。

方　法

1．分析資料

『幼児のことば資料』第2巻「4歳誕生日一日前の一日のことばの記録」(1981)，第3巻「1歳期（1歳から1歳11か月まで）のことばの記録」(1982)，第4巻「2歳期（2歳から2歳11か月まで）のことばの記録」(1982)，第5巻「3歳前半期（3歳から3歳5か月末まで）のことばの記録」(1983)，第6巻「3歳後半期（3歳6か月から3歳11か月末まで）のことばの記録」(1983)に記載されている幼児の話しことばを1次資料とした。この資料は，1男児の話しことばを満1歳から満4歳までの3年間に渡って，母親の協力のもとに採集して作成された。採集は録音テープによって行われ，その後文字化したものが記載されており，1か月に4-7日ずつ集録されている。この男児は，昭和49年3月3日生まれの第1子であり，昭和51年4月21日には，第2子となる妹が誕生している。

2．2次資料及び3次資料作成の手続き

1次資料に収められている発話の中から，名詞を抽出して2次資料を作成した。名詞の抽出は1か月単位で行い，同月に同じ名詞が出現した場合は初出語のみを抽出した。名詞が明瞭に発語されていない場合でも，前後の文脈（母親との会話）をみて，母親が子どもの発語内容を理解していると判断されれば，そのことばも抽出した。母親に促されてそのまま繰り返したような場合は抽出対象としなかった。

2次資料で得られた名詞を，Nelso(1973)や鈴木(1974)の研究で使用されたものを参考に決定した14の意味カテゴリ(Table 1)に従って分類した。意味分類は6か月単位で行った。

Table1 名詞の意味分類に用いた分類カテゴリ

A	動物
B	食物・飲物
C	学校・文房具・楽器・玩具
D	交通・乗物
E	家具・家庭用品
F	衣類・容姿
G	人間
H	身体・衛生
I	社会（場所・スポーツ・遊び）
J	数・形・色
K	自然現象
L	植物
M	虫
N	その他

結果と考察

1. 名詞の総語数における発達的変化

2次資料をもとに，1か月単位で名詞の総語数を算出した。1次資料では，月によって集録日数にばらつきがあったため，各月の総語数を集録日数で割ってデータを求めた(Figure 1)。

語数の増加は1歳期を通じてわずかずつであるが，2歳を目前とした10か月から11か月あたりから動きがみられる。1歳10か月から2歳1か月にかけて，それまでの増加率と比べるとかなり急激に増加していることがわかる。安定して使える語数が10語になるまでには時間がかかるが，10語あたりから少しずつ加速し始める（綿巻，1989）という傾向が本研究でも確認されたといえよう。本研究では名詞のみを分析対象としているので，Figure 1からは1歳半(Nelson, 1988)から2歳（藤永・盛岡，1970）を越えたあたりで起こる語の爆発的増加(word explosion)の様子を確認することはできないが，その可能性をうかがい知ることはできるであろう。

2歳期以降は，概して増加率に大きな変動はみられず，多少の上下はありながらもほぼ一定の割合で増加しているといえるが，2歳後半期と3歳後半期において伸び率が停滞している。大久保(1967)は，1人の幼児の使用語彙の追跡を行った結果，2歳前半期と3歳では語彙成長速度が速かったのに対し，2歳後半期では初出語が少なくなったことを報告した。その理由として，2歳後半期は，1歳半頃から習得し2歳前半期に習熟しはじめた語を駆使して文を構築する技能を身につけることに熱中するため，語彙成長はその犠牲になるのではないかと述べている。本研究の結果もそうした傾向を反映しているものと考えられる。この点については，2次資料作成にあたって筆者自身が実感することができた。2次資料作成の際に，

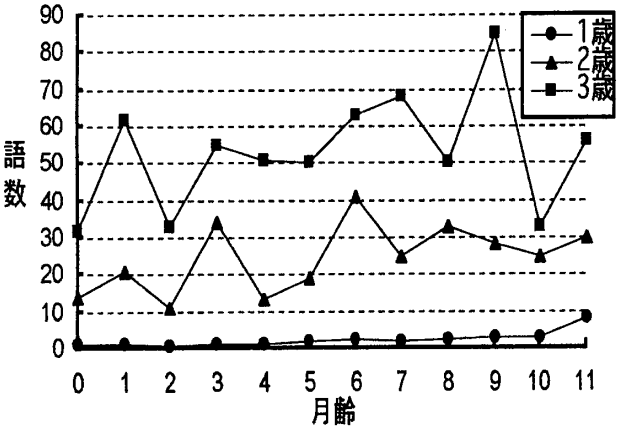

Figure 1 各年齢段階における名詞語数

1次資料に収められている観察児と母親との対話を読み進めながら名詞のみを抽出していったが，加齢に伴って，名詞以外の品詞が増加していく様子や，観察児が文の構築を試みていく様子などがよく現れていた。

2. カテゴリ別にみた名詞語数の発達的変化

2次資料で抽出された名詞について，6か月毎に14の意味カテゴリ(Table 1)に分類して3次資料を作成した。Table 2に各意味カテゴリの出現語数を示す。

ほとんどのカテゴリに共通しているのは，語数の増加の時期である。1歳後半期から2歳後半期にかけてがそれに当たり，カテゴリ間で伸び率に違いはみられるにせよ，カテゴリ内においては最も語数が増加した時期となっている。同様に，語数がピークに達する時期も3歳前半期と時を同じくしている傾向にある。しかし，3歳後半期では，カテゴリの半数が3歳前半期よりも減少している。この傾向の一因として，前述した他品詞の獲得や文構築への熱中などが考えられよう。その一方で，3歳後半期にあって語数が更に増加している項目もある。B[食物・飲物]，C[学校・文房具・楽器・玩具]，E[家具・家庭用品]，I[社会]，K[自然現象]，L[植物]，N[その他]の7項目がそれにあたり，その中でも全時期を通してコンスタントに語数が増加しているカテゴリは，C[学校・文房具・楽器・玩具]，E[家具・家庭用品]，I[社会]，N[その他]の4項目となっている。

3歳後半期に発現したE[家具・家庭用品]の名詞は60語であり，N[その他]の72語に次いで2番目に多い。E[家具・家庭用品]は，幼児の家庭生活と深く関わっており，またそのカテゴリに含まれる具体物も豊富であることがその一因であると考えられる。それに対して，C[学校・文房具・楽器・玩具]とI[社会]には，家庭外の生活，つまり社会生活に関わる名詞が分類されている。村井(1970)は，語彙成長の要因として1.音声発達，2.成人語化，3.生活空間の拡大，4.質問の利用，5.抽象機能の発達を挙げているが，社会生活に関係する語数の増加は，3.生活空間の拡大を伴って実現されるとみなしてよいであろう。また，N[その他]には，主に抽象的な名詞を分類したのであるが，N[その他]の増加に村井(1970)の挙げる5.抽象機能の発達との関連を推測することも可能であろう。

3. 幼児の生活経験と名詞の獲得過程

本項では，幼児が名詞を獲得していく過程を生活経験との関連からとらえるために，幼児の実生活をより反映していると思われるカテゴリに絞って検討

Table 2 各年齢段階における意味カテゴリ別名詞語数

意味カテゴリ ＼ 年齢（歳;月）	1;00-1;05	1;06-1;11	2;00-2;05	2;06-2;11	3;00-3;05	3;06-3;11	計
A［動物］	3	4	4	21	23	18	73
B［食物・飲物］	6	8	24	32	29	35	134
C［学校・文房具・楽器・玩具］	0	4	18	28	41	46	137
D［交通・乗物］	7	12	45	79	93	73	309
E［家具・家庭用品］	1	16	33	51	52	60	213
F［衣類・容姿］	1	6	18	23	16	12	76
G［人間］	3	3	18	31	36	34	125
H［身体・衛生］	0	15	26	41	49	43	174
I［社会(場所・スポーツ・遊び)］	0	1	26	49	50	51	177
J［数・形・色］	2	8	34	43	66	46	199
K［自然現象］	0	1	11	31	25	45	113
L［植物］	0	5	14	28	17	20	84
M［虫］	2	0	0	9	22	5	38
N［その他］	0	3	25	67	71	72	238
計	25	86	296	533	590	560	2090
計／集録日数	25/43 (0.58)	86/57 (1.51)	296/30 (9.87)	533/33 (16.15)	590/22 (26.82)	560/17 (32.94)	

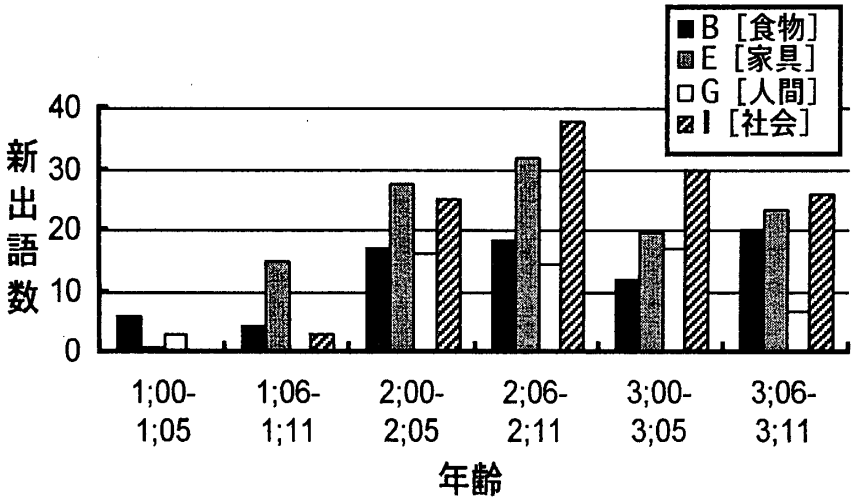

Figure 2 各年齢段階における各カテゴリの新出語数

する。そこで，幼児の家庭生活に関するカテゴリとしてB[食物・飲物]とE[家具・家庭用品]とを，社会生活に関するカテゴリとしてG[人間]とI[社会]とを取り上げ，その4カテゴリにみられる傾向を見出していく。選出した4カテゴリについて，新出語数に限ってその推移を追ったのがFigure 2である。

さて，1歳前半期の語数が他の2カテゴリよりも多かったB[食物・飲物]とG[人間]とについて，実際に出現した語彙は以下のようになっている。

B［食物・飲物］	G［人間］
ﾏﾝﾏ	ﾀｰﾀﾝ
ﾎﾞｰ（ﾎﾞｰﾛ）	（観察児の愛称）
ﾊﾟｰﾝ（ﾊﾟﾝ）	ｵﾄｰﾁｬﾝ
ﾁｰｼﾞｬ（ﾁｰｽﾞ）	ﾏﾏ
ﾊﾟｰｲ（ｵｯﾊﾟｲ）	
ﾐｽﾞ	

このデータから観察児の生活の様子を解釈してみると以下のようになるであろう。これらの名詞は，幼児が生活を営んでいくうえで最低限必要なことばではないであろうか。生命維持に必要な〈食〉の欲求を満たすためのことばと，そうした欲求を抱く本人に加えて，欲求を満たしてくれる存在である〈人間〉を表すことばが出現していると考えられる。

1歳後半期になると，B[食物・飲物]は更に増加していくのに対し，G[人間]は前述した3語より増えることはなくその伸びは停滞している(Figure 2)。この点について解釈を試みると，観察児の日常生活に必要とされる人間語彙は，この時点においても前掲の3語で事足りているということであろうか。それに対して，1歳後半期に急増し最も大きな伸びをみせているのがE[家具・家庭用品]であり，そのことからは，観察児の身近な具体物への興味の広がりを推測することができる。

1歳後半期から2歳後半期にかけてはE[家具・家庭用品]の出現語数及び新出語数の増加が著しい。しかし，2歳後半期あたりからE[家具・家庭用品]に代わってI[社会]の新出語数が増加している(Figure 2)。I[社会]もその後下降してはいるが，各時期を通じて他カテゴリと比較すると新出語数が最も多い結果となっている。ここで，新出／既出の別なく算出した語数について各年齢段階における4カテゴリの出現割合を求めた結果を紹介する(Figure 3)。1歳前半期ではB[食物・飲物]が，1歳後半期ではE[家具・家庭用品]がその多くを占め，2歳前半期からG[人間]とI[社会]の割合が増加している。この傾向はこれまでの考察と一致するものである。しかし，2歳前半期以降の割合に大きな変動はみられない。Figure 2では2歳後半期から3歳前半期にかけて社会生活に関係する新出語が増える傾向が示されているが，Figure 3ではG[人間]やI[社会]の出現割合が突出しているというわけではない。つまり，あるカテゴリの新出語数が増加する時期に，他のカテゴリの出現語数がむやみに減少するということはないようである。まとめると，新出語数の増加に関しては，2歳前半期まではB[食物・飲物]とE[家具・家庭用品]とが優位であるが，2歳後半期以降はI[社会]の増加が顕著となる。また，他のカテゴリほどではないにしてもG[人間]もこの時期から豊富になっていく。一方で，新出／既出の別なく算出した全体数における各カテゴリの出現割合は，2歳前半期以降，加齢とともに大きく変動するということはなく，大体一定の割合が保たれていた。以上のことから，B

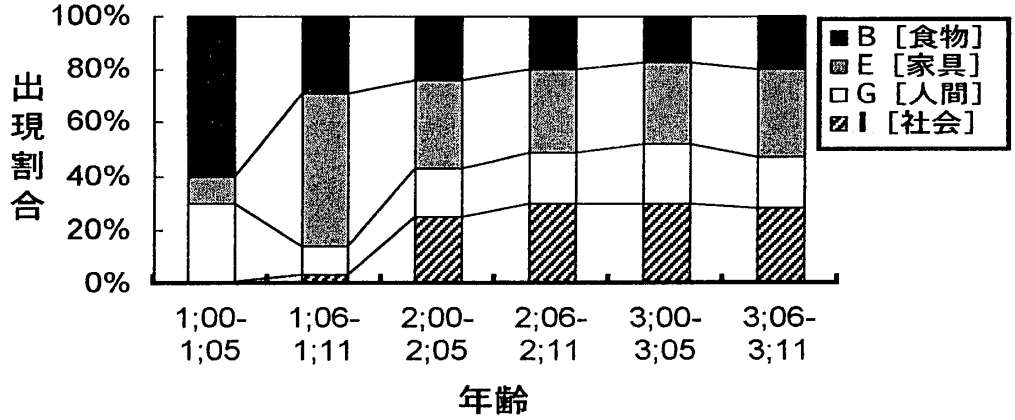

Figure 3 各年齢段階における各カテゴリの出現割合

[食物・飲物], E[家具・家庭用品], G[人間], I[社会]の4カテゴリについては，2歳前半期以降の幼児は，それまでに獲得した名詞をコンスタントに使用しつつ新しい名詞も獲得していき，そして，家庭生活に密着した語彙と社会的な広がりを持つ語彙とをバランスよく使用した言語生活を営んでいることが示唆される。

最後に，幼児の社会生活に関連する名詞の獲得過程を具体例に基づいて検討する。I[社会]の2歳後半期と3歳前半期に出現した新出語を一覧にまとめた(Table 3, 4)。2歳後半期(Table 3)の商店に関してであるが，それまでは，オミシェ(店)とシュパーマーケット（スーパーマーケット）とヤオヤ（八百屋）の3語のみであった語彙が4倍の12語に増えている。ものを売買する場所を全て“店”と表現することから脱却し，売買する品物に見合った商店名を発語することが可能になったことを示している。“店”の下位カテゴリとして各商店を把握する力の萌芽を見出すことができよう。3歳前半期(Table 4)になると，その他の項目に，ニッポン，イギリスといった国名が登場している。また，ガイコク（外国）やセカイ（世界）といった，より抽象的な名詞もみられ，歩いて行ける範囲からその外界へと向かっていく彼にとっての社会の広がりをうかがうことができる。

次に，G[人間]について2歳後半期と3歳前半期にみられた新出語をまとめた(Table 5, 6)。2歳前半期までは主として家族に関する語が獲得されてきたが，2歳後半期(Table 5)では，身内以外の人を名字で表す事例がみられる。また，ドロボウやアマエンボウなど人の属性を表現する名詞や，ヒトやニンゲンなどのより抽象的な名詞も登場しており，下位概念と上位概念の獲得が進んでいく様子をうかがうことができる。

Table 3 2歳後半期にみられたI［社会］に関する新出語彙

商　店	公　共	スポーツ・遊び	その他
ﾆｸﾔｻﾝ	ｶﾈ（鐘）	ﾔｷｭｳ	ｵﾐﾔｹﾞ
ﾏﾙﾐｽﾞ	ｵﾃﾗ（寺）	ﾌﾟﾛﾔｷｭｳ	ﾊﾀｹ
ｼｬｶﾅﾔｼｬﾝ（魚屋）	ｵｼﾛ（城）	ｽｷｰ	ｶｶｼ
ﾃﾞﾊﾟｰﾄ	ｼｬｲﾚﾝ（ｻｲﾚﾝ）	ｶｸﾚﾝﾎﾞ	ﾒﾋﾞﾅ
ｵｶｼﾔｼｬﾝ	ｼｮｰﾎﾞｰ（消防）	ｶｺﾞﾒｶｺﾞﾒ	ｵﾀﾞｲﾘ
ｼｭｳﾘﾔｼｬﾝ	ｹｲｼｬｼｭｼｮ（警察署）		ｼﾞｭｳｺﾞﾔ
ﾀｶｼﾏﾔ	ｷﾞﾝｺｳ		ｸﾆ（国）
ｵﾓﾁｬﾔｼｬﾝ	ｶｲｼｬ		
ﾆﾁﾖｳﾀﾞｲｸｼｪﾝﾀｰ	ﾌﾝｼｭｲ（噴水）		
（日曜大工ｾﾝﾀｰ）	ﾄｵﾘ（通り）		
ｸｼｭﾘﾔｼｬﾝ（薬屋）	ﾊｼ（橋）		
ﾄｺﾔｼｬﾝ	ﾀﾞﾝﾁ		
ｵﾓﾁｬｳﾘﾊﾞ	ｺｳｼﾞ（工事）		

Table 4 3歳前半期にみられたI［社会］に関する新出語彙

商　店	公　共	スポーツ・遊び	その他
ｺﾞﾐﾔｻﾝ	ｼｭｳﾘｺｳｼﾞｮｳ	ｲｼｹﾘ	ｵﾈﾀﾞﾝ
ﾄﾖﾍﾟｯﾄ	ﾘｮｳｷﾝｼﾞｮ	ﾜﾅｹﾞ	ｵｵｶｼﾞ（大火事）
ﾀｸｼｰﾔｻﾝ	ﾋﾞﾙﾃﾞｨﾝｸﾞ	ｱｿﾋﾞ	ﾀﾝｼﾞｮｳﾋﾞ
ｱｲｽｸﾘｰﾑﾔｻﾝ	ｹｲｼﾁｮｳ		ｵﾄﾅﾘ
ｲﾅﾀﾞﾔｻﾝ	ﾀﾞﾑ		ｼﾞｭｳｼｮ
ﾄﾚｰﾗｰﾔｻﾝ	ｴｲｶﾞ		ｾﾀ（瀬田）
ﾍﾟﾝｷﾔｻﾝ	ﾀｲｿｳｷｮｳｼﾂ		ｶﾐﾉｹﾞ（上野毛）
	ﾎｹﾝｼﾞｮ		ﾆｯﾎﾟﾝ
			ｲｷﾞﾘｽ
			ｶﾞｲｺｸ
			ｾｶｲ

Table 5 2歳後半期にみられたG［人間］に関する新出語彙

固有名詞	抽象名詞	その他
ｱｼｬｸﾗｼｬﾝ	ﾋﾄ	ｵﾈｴｼｬﾝ
（朝倉さん）	ﾆﾝｹﾞﾝ	ﾄﾞﾛﾎﾞｳ
ｲﾜｯﾄｼｬﾝ	ｵﾝﾅﾉｺ	ﾍｲﾀｲ
（岩手さん	ｵﾄﾓﾀﾞﾁ	ｱﾏｴﾝﾎﾞｳ
ﾕﾐﾁｬﾝ		ｹｶﾞﾆﾝ
ｲﾝﾃﾞｨｱﾝ		ｼｮｳﾎﾞｳｵｼﾞｼｬﾝ
		（消防おじさん）

Table 6 3歳前半期にみられたG［人間］に関する新出語彙

固有名詞	抽象名詞	職　業	その他
ｺｲｽﾞﾐﾀｹﾋｺ	ｵﾄﾅ	ｳﾝﾃﾝｼｭｼｬﾝ	ｵｷｬｸｻﾝ
（観察児氏名）	ｺ（子）	ﾊｲｼｬｻﾝ	ｵﾘｺｳｻﾝ
ｺﾊﾞﾔｼｻﾝ		ﾀﾞｲｸｻﾝ	ｵｸｻﾝ
ﾏﾘｺﾁｬﾝ		ｺｯｸｻﾝ	ﾊﾀﾞｶﾝﾎﾞ
ﾏﾕｺﾁｬﾝ			ｵﾋﾒｻﾏ
ｱｯｺﾁｬﾝ			ﾎﾞｳﾔ

3歳後半期(Table 6)では，職業に関する語が目立って増加している。2歳後半期(Table 5)での商店の分化に次いで，職業についても名詞の分化が進んでいるようである。以上から，2歳前半期までは，家庭生活の中で必要とされるごく身近な語の獲得が先行するが，2歳後半期から3歳前半期にかけては，家庭の外を取り巻く社会や，そうした社会で出会う家族以外の人などに関する語が獲得されていくという道筋が推測される。

以下，要約すると，本研究は，1男児の話しことばを縦断的に追跡して採集した1次資料をもとに，名詞の獲得過程の様相を探った。1次資料から名詞のみを抽出した2次資料を作成し，各月に出現した名詞語数を算出した。次に，2次資料をもとに6か月毎に名詞の意味分類を行って3次資料を作成した。これらの資料に関して，①名詞の総語数における発達的変化，②カテゴリ別にみた名詞語数の発達的変化，③幼児の生活経験と名詞の獲得過程の3点から分析，考察を行った。その結果，以下のことが明らかになった。

まず，名詞の語数は1歳後半期に急上昇し，その後，2歳後半期の停滞期を経て，多少の上下はあるが徐々に増加していく。この傾向から，ある時期を境に表出語彙が出現し始め，急激に語数が増加するということ，3歳後半期に至るまでには，名詞以外の品詞の獲得が徐々に行われ，それらを使用してより複雑な文を組み立てていくことに，より興味を示すようになることが推測された。

次に，抽出された名詞を14カテゴリに分類して，各年齢段階における各カテゴリの語数を比較した結果，語数が急増する時期（1歳後半期から2歳後半期）や，増加率がピークに達する時期（3歳前半期）の一致がみられた。3歳後半期には，語数が増加するカテゴリと減少するカテゴリとに半数ずつに分かれたが，全時期を通じてコンスタントに伸びたのはC[学校・文房具・楽器・玩具]，E[家具・家庭用品]，I[社会]，N[その他]の4カテゴリであった。語数増加の一因として，E[家具・家庭用品]については日常生活との密着度を，C[学校・文房具・楽器・玩具]やI[社会]やN[その他]については，加齢に伴う生活空間の拡大や抽象機能の発達などの可能性に言及した。幼児は，家庭生活に関わりの深い語彙を増やしつつも，生活経験の広がりや概念形成の活発化とともに社会的，抽象的な語彙をも獲得していくと推測された。

最後に，幼児の家庭生活に関係するB[食物・飲物]，E[家具・家庭用品]と，社会生活に関係するG[人間]，I[社会]の4カテゴリについて検討した。加齢に伴う全体的傾向として，B[食物・飲物]とE[家具・家庭用品]は2歳後半期をピークに新出語の伸び率が低下していくのに対し，G[人間]とI[社会]は上昇していった。しかし，あるカテゴリの新出語の増加に伴って他のカテゴリの語数が著しく減少するということはなかった。2歳前半期以降，各カテゴリの出現割合は加齢と

ともに大きく変動することはなくほぼ一定であった。これらの結果から，2歳前半期までは家庭生活の中で必要とされる身近な語の獲得が先行するが，2歳後半期から3歳前半期にかけては家庭外の社会生活に関心が向き，そういったカテゴリに含まれる語の獲得が活発になること，それと同時に，2歳前半期以降は家庭生活に密着した語と社会生活に関わる語とをバランスよく用いた言語生活を営んでいることが確認された。

今後の検討課題としては，G[人間]とI[社会]とについて行ったように，語彙内容の推移を追いながらその推移をもたらす背景について解釈することを他のカテゴリについても試みることや，本研究で使用した1次資料に基づいて，名詞以外の他品詞についても同手法で分析，考察していくことが挙げられる。

引用文献

天野清 1976　言語心理学　現代双書　第3巻　新読書社

バターワース & ハリス　村井潤一・小山正・神土陽子　松下淑（訳）　1997　発達心理学の基本を学ぶ　ミネルヴァ書房
(Butterworth, G., & Harris, M. 1994 *Principles of developmental psychology*. East Sussex: Lawrence Erlbaum Associates.)

藤永保・盛岡健二　1970　言語と人間　東海大学出版会

Harris, M., Jones, D., Brookes, S., & Grant, J. 1986 Relations between the non-verbal context of maternal speech and rate of language development. *British Journal of Developmental Psychology*, **4**, 261-268.

Hull, C. L., & Hull, B. I. 1919 Parallel learning curves of an infant in vocabulary and in voluntary control of the bladder. *Pedagogical Seminary*, **26**, 272-283.

国立国語研究所　1981-83　幼児のことば資料　秀英出版　2-6巻

村井潤一　1970　言語機能の形成と発達　風間書房

村田孝次　1977　言語発達の心理学　培風館

Nelson, K. 1973 Structure and strategy in learning to talk. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **38**, Serial No. 149.

Nelson, K. 1988 Constraints on word learning? *Cognitive Development*, **3**, 221-246.

大久保愛　1967　幼児言語の発達　東京堂

鈴木昌樹　1974　小児言語障害の治療　金原出版

綿巻徹　1979　言語発達の個人差　横山正幸（編）　保育入門シリーズ　第8巻　乳幼児の言語指導　北大路書房　Pp. 120-124.

綿巻徹 1989　コミュニケーションと言語の発達　山内光哉（編）　発達心理学　上巻　ナカニシヤ出版　Pp. 93-100.